（様式２）

公益社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書
2022年度報告書

代表者氏名	李　艶	所属	聖泉大学　人間学部
研究集会等名称	文化と心理学		
成果概要	2012年度から2022年度まで、11年間研究会活動が継続できた。日本心理学会の支えがないと考えられない。11年間【文化と心理学研究会】は大きな成果を挙げられた。日本全国にて公開する講演会は通算 15 回を行った。公開講演会の参加者の総数は千人を超え、参加者から大変好評を頂いた。 2022 年度は研究会がキーワードの共感を中心に比較文化心理学の視点から研究を行った。研究では、新型コロナウイルスの感染拡大により、それまで通りの生活は送れなくなり、仕事を失い、大切な人をなくし、大勢が心に深い傷と喪失感を負ったことが明らかになった。経済そして心身に及んだダメージは、乗り越えるのにこれから数年、もしかして十数年かかるほど深刻なことと痛感した。「心的外傷後成長 PTG」は「災害後」新たな絆を育んだり、それまでより強い信念や価値観を抱くようになったりすることを指す。比較文化という視点から PTG を検討することにより、世界のアフターコロナーにおける恢復に一助が得れば本研究会の取り組みに意義があったと実感できた。 2022年度助成研究期間には、研究会２回と講演会１回を開催した。 内容は以下に示した通りだ。 研究会の内容は、一つは昨年度の続き、在日留学生の異文化適応と在日労働者の異文化適応についてで、研究代表者李の研究成果を紹介され、異文化適応の心理過程について検討を行った。もう一つは共感をキーワードとしてコロナー感染により、社会の変化・変容について、外国の研究者を交えてオンライン方式で討論を行った。 講演会は引き続き、山元氏による「外国人労働者の気持ちを共感する力について」の話をして頂いた。内容は、異文化適応は外国人のことだけではなく、日本人も異文化適応が必要だ。相手の気持ちを共感することにより、相手に寄り添うことができ、相互理解を図るために役立つ重要だ。異文化適応は母国文化を大切にするうえで他文化に好意をもって寄り添う気持ちから始まる。もちろん語学力は異文化適応の質に影響する。」といった豊富なものだった。学生聴講者から「いい勉強になった」「現場からのリアルな話を聞くことができ、よかった」の好評な声はあった。		

2022年度研究会集会参加者リスト

網谷　仁志
井上　智咲
井上　真登
今居　駿也
岩永　碧
内田　滉平
内堀　美咲
岡　宏匠
尾木　翔
小椋　大士
加藤　大暉
木内　大雅
北村　結愛
小平　祐梨
小林　海輝
近藤　魁
佐野　凜斗
澤井　春奈
芹澤　祥大
田中　菜歩
千代　紫祐也
中川　颯大
夏原　雄太
西川　凜
柊本　絢香
平中　雄大
福留　悠斗
藤野　聖也
船居　利貴
前田　柚希
益田　勇誓
味田　祥兵
宮村　友基

村井　太樹
森本　勝利
安田　幸夫
横田　望

吉田　悠真
横田　知希
山田　望佑羽
山下　諒人
山口　菜々美
山岡　歩
安井　駿ノ助
森　喜咲
村野　紗希
村上　希弥
宮下　龍信
三田村　和弥
二見　彩月
福田　崇洋
疋田　拓也
原田　修成
原田　哉汰
西山　翔悟
西﨑　千莉
西浦　瑠菜
中野　優杜
徳島　大介
田中　飛悠
竹井　飛翔
薗林　夏音
鈴木　恭佳
佐藤　美緒
佐藤　菜々香
佐治　日奈子
齋藤　環樹
西條　汐音

金剛　悠真
熊谷　眞
草野　達彦
木島　朋香
岸田　亜莉沙
加藤　心一
垣立　直哉
落　弘哉
尾迫　玲空
小熊　璃々
大塚　幸弥
上田　優太
植田　潤海
今井　永遠
和泉　喜子
嵐谷　迅
渡野　友梨香
池田　総揮
國枝　涼平
毛利　真也
中村　知颯
髙田　雄翔
﨑山　起未
國重　あいり

2023年 3 月30日

日本心理学会研究会　2022　年度会計報告書

研究会名称　文化と心理学研究会

研究会番号　研　22009

助成金額　¥30,000

年 月 日	項 目	金 額
2022年12月24日	外部講師による研究会講演会講師謝礼(1名)	¥30,000
	合計	30,000